# とんだ花嫁

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とんだ花嫁

【Ｎコード】
Ｎ６５４０Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
独特な王様アンリ四世。この人がイタリアから来る新婦を覗いてみたところ。史実を元にしたお話です。

# 第一章

とんだ花嫁

フランスブルボン王朝の開祖であるアンリ四世は独特な人物だった。まず彼はいつも大蒜の匂いを身体中から放っていたのである。

「陛下、またですか」

「また大蒜をですか」

「美味いな、あれは」

顔を顰めさせる家臣達に対して豪快な笑顔と共に語るのだった。

「やはりな。大蒜はいい」

「しかし匂いが」

「毎食食べられているではないですか」

「余にとってはパンと同じだ」

彼は平然として話すのだった。

「大蒜はな」

「何故そこまで召し上がられるのですか？」

「匂いがするというのに」

「精がつくからだ」

だからだというのである。

「それでだ」

「それで、ですか」

「大蒜がお好きなのですね」

「大蒜を食べていると元気が出る」

王はさらに話す。

「余は大蒜を食べ続けるぞ」

「はあ、そうですか」

「ずっとですか」

とにかく大蒜臭かった。そのうえ非常に女好きだった。愛人が何人もいてそれでいつもそのうちの一人が妊娠している有様だった。

それについては。こんなことを言うのだった。
「次は男か女か」
「今度生まれるお子様がどちらか、ですか」
「どちらだろうな」
こんな話を家臣に対してするのである。よく言えば屈託がなく悪く言えば品がない。随分とガラッパチな態度の王様である。
「本当に楽しみだ」
「どちらを望まれますか？」
家臣の一人が尋ねた。
「それでは」
「どちらでも結構だ」
また笑いながら話す王だった。
「男でも女でもな」
「それは何故ですか？」
「男なら貴族を増やせる」
愛人の子だからだ。嫡出かそうでないかは欧州ではかなり厳しい。
「そして女ならばだ」
「その場合は？」
「婚姻に使えるし花が増える」
「花が、ですか」
「どちらにしろいいことだ。とにかく子供は多い方がいい」
屈託のない、悪く言えば王らしくない下品な笑いでの言葉だ。
「だからだ」
「そういうことなのですね」
「左様、さてどちらかどうか」
あらためて家臣に提案してきた。
「賭けるか？」
「いえ、それは」
生真面目な家臣はその申し出は断った。こんな王だった。
その王は今は王妃がいなかった。愛人は多いが王妃は今のところ

いなかった。そのことが問題になっていたのである。
それでだ。家臣達もこう勧めるのだった。
「やはり王妃をお迎え下さい」
「王としての対面がありますので」
「そうだな」
王も彼等の言葉に素直に頷いた。
「王がいれば王妃がいるのは当然だな」
「その通りです」
「ですからここは」
「わかっている」
ここでも静かに頷く王だった。

## 第二章

「それではだ」
「はい、それではです」
「お相手ですが」
「それは誰だ？」
王妃を迎えることになった。そのうえで次の問題はこれだった。
王妃にするのを誰にするか、現実の問題であった。
「それで誰にするのだ？」
「そうですね。イタリアに縁を作りたいですし」
「ここはメディチ家にしますか」
「それでどうでしょうか」
「あの家か」
メディチ家と聞いてだ。王はまずは考える顔になった。
そうしてそのうえでだ。こんなことを言い出した。
「あの家とは前に縁組していたな」
「はい、よく覚えておられますね」
「その時のことを」
「忘れるものか」
王の顔が歪んできた。嫌なことを思い出す顔だ。
「カトリーヌ王太后のことはな」
「あの方のメディチ家です」
「あそこです」
「止めた方がいいのではないか？」
王はその顔で玉座から家臣達に話した。
「あの時みたいにならぬか」
「あの時ですか」
「あのかつての時ですね」
「思い出したくもないことだ」

王がここまで言うのには理由があった。そのカトリーヌ、カトリーヌ＝ド＝メディチはヴァロア家のアンリ二世の妃であった。その彼女が夫の死後実験を握り新教徒の虐殺を招いたのだ。

パリの至る場所で虐殺が起こった。所謂サン＝バルテルミーの虐殺である。新教徒達だけでなくたまたま喧嘩をしている相手を殺す者までいた。彼女にしては新教徒との和解を進めるつもりがとんだ事態になってしまった。事件を起こしてから彼女は一転して虐殺を推奨していたとも言う。これまた開き直ったものだがそこからユグノー戦争というフランス中を巻き込んだ内戦まで再発するのだから酷い話である。

このアンリ四世は元々新教徒でカトリックに改宗して王になった。その時にナントで勅令を出して新旧両者の対立を解消させている。そうした経緯からメディチ家と聞いただけで身構えてしまったのである。

「あれはな」

「ですがカトリーヌ様ではありません」

「しかもあの頃とは状況が違いますし。婚礼の持参金もかなりですし」

「それはわかっている」

王もだ。わかっていた。しかしであった。

「だが、な」

「感情としてですか」

「どうしてもなのですね」

「しかしメディチ家以外にないか」

一応念を押した。

「婚姻を結ぶのに最適なのは」

「ハプスブルク家は？」

「若しくはイングランドは」

「馬鹿を言うでない」

どちらもだった。その名前を聞いただけでさらに不愉快になる王

であった。
「あの二つは駄目だ」
「はい、それではメディチ家ですね」
「そちらになります」
「神聖ローマもスペインもイングランドも大嫌いだ」
先の二国がハプスブルク家のものである。ハプスブルク家とはヴァロア家からの対立関係でありイングランドとは獅子心王からの対立関係だ。とかく敵の多いのがフランスの伝統だ。
王にとってはどちらも憎むべき相手だ。返答は一つしかなかった。
「どちらも論外だ」
「ですからメディチ家しかありません」
「イタリアへの縁戚もできますし」
「わかった」
多少憮然としながら頷いてみせた。
「それではな」
「はい、ではそういうことで」
「話を進めていきます」
こうしてメディチ家との婚礼で決まった。相手はマリーという名前なのがわかった。そうしてその王妃がフランスに来る時になってだ。王はこんなことを言い出した。

# 第三章

「王妃の顔を見たいな」
「はい？」
「王妃様のですか」
「そうだ、顔を見たい」
こう家臣達に言うのだ。その威厳のある顔に今は悪戯っぽい笑みを浮かべて。
「是非な」
「肖像画を御覧になられたのでは？」
「それを」
「わしは本当の顔が見たいのだ」
こう家臣に言い返す。
「是非な」
「是非にと言われましても」
「それは」
家臣達は王の言葉に難しい顔になる。
「一体どうしてですか」
「どのみちおわかりになられることなのに」
「間も無く婚礼です」
「その時まで待てませんか」
「待てぬ」
返答はこんなものだった。
「だから言っているのだ」
「では。どの様にして」
「王妃の顔を御覧になられるのですか」
「決まっている。盗み見るのだ」
こんなことを言い出した。
「そうするのだ」

「お世辞にもいいとは言えませんね」
「全くです」
家臣達は明らかに咎める顔だった。
「王ともあろう方がです」
「しかしそれでもなのですね」
「見ると言ったら見るのだ」
言っても聞かない感じだった。
「わかったな。それではだ」
「わかりました」
「それでは」
家臣達も観念した。そうしてであった。
王は王妃が宮殿に到着するとだ。早速その部屋の天井に忍び込んだ。その忠実な家臣達も彼が心配でついてきている。
そのうえで覗くのだった。だがまだ王妃は来ていなかった。
「ここまで来たらですね」
「どうしてもですね」
「そうだ、絶対に見るぞ」
やはり言っても聞かない。天井からじっと部屋の中を見ている。
「これからな」
「まあ王妃は十七歳の方ですし」
「期待してもいいですかね」
「期待しておるぞ」
実際にそうだという王だった。
「だからだ。よいな」
「わかりました。王を御一人にはできませんし」
「我々も」
一緒にいるのだった。そうして彼等は王妃が来るのを待っていた。
暫くするとだ。部屋の中に誰かが来た。それも何人もだ。
「では王妃様」
「こちらです」

「はい」
まずはだ。野太い声だった。
「わかりました。それでは」
「太い声だな」
「はい、それにです」
家臣の一人が王に応えた。
「あのフランス語はイタリア訛りです」
「ということは」
「あの声の主が王妃なのか？」
王は上から部屋を覗きながら首を捻った。
「そうなるのか」
「というとです」
「あの方でしょうか」
家臣達は今度はその部屋の中に来ている一際見事な、眩いまでの装飾で飾られたドレスの女性を指し示して言った。

## 第四章

「あの方が王妃でしょうか」
「王の」
「何とっ」
その女性を見てだ。王は思わず唸った。何とだ。
「あの顔を見ろ」
「太めですね」
「そうですね」
「太いどころではないぞ」
かなり肥満していた。王が見て驚く程にだ。
「あれでは足の太さも相当なものだぞ」
「そうですね。おそらくは」
「かなりのものかと」
「ううむ、何ということだ」
王はその王妃の姿を見て額に汗さえ流していた。
「これは困った。あれがわしの后か」
「肖像画と違いますね」
「それも全く」
「しかもだ。あの顔はだ」
王妃のその顔を上から見てだ。王はまた言った。
「あれは十七の顔ではないぞ」
「ええ、流石にあれはです」
「十七ではないですね」
どう見てもそれより老けていた。女のことについては歴戦の王はだ。その顔から年齢を予測してみせたのである。
「二十七だな」
「二十七ですか」
「そんなところなんですね」

「十歳もサバを読んでおるぞ」
王は憮然とした顔で述べた。
「幾ら何でもやり過ぎだろう」
「確かに。十も違えばです」
「それはもう全く違いますから」
「その通りだ。また随分と無茶なことをするな」
王はその憮然とした顔で話した。
「全く以てな」
「そうですね。それでなのですが」
「どうされますか？」
家臣達はあらためて王に問うた。
「この御成婚」
「どうされるので」
「嫌なことだ」
これが王の本音だ。
「あの様な年増を王妃に迎えるのか」
「そして御子をもうけなければなりません」
「必ずです」
「ううむ。先が思いやられる」
王は頭を抱えんばかりであった。天井裏で嘆くことしきりだった。
「こんなことでは」
「しかし仕方ないのでは」
「こうなっては」
「わかっておる。それではだ」
その憮然とした顔を家臣達に向けての言葉だ。
「行くぞ。婚礼の場にだ」
「はい、それでは」
「今より」
こうしてだった。王は婚礼の場に向かった。そうして実際に婚礼の場で花嫁となる王妃を迎えた。その時の王はというとだ。

「ようこそ来られました」
優雅に笑ってだ。その太っていて年増の王妃を迎えるのだった。
「我が妻よ」
「有り難うございます。貴方がなのですね」
「はい」
言葉に威厳も含ませていた。王らしく。
「貴女の夫となる者です」
「それでは。私達はこれから」
「生涯二人です」
離婚を認めないカトリックの教理に従った言葉だ。
「それで宜しいですね」
「是非。それでは」
「こちらへ」
こうしてだった。何でもないといった態度で婚礼を迎えるのだった。そしてその後初夜も終えてだ。あらためて家臣達に話すのだった。

## 第五章

「仕方ないな」
「仕方ありませんか」
「そう仰るのですね」
「こうするしかないのだからな」
困り果てた顔での言葉だった。
「王としてな」
「そうですね。王として」
「ここは」
「しかしだ。女達はそのままだ」
愛人達のことである。
「やがて王妃に会わせて話をつける」
「それもですか」
「されるというのですか」
「話しておかねばならんだろう」
それは絶対という口調だった。
「違うか？それは」
「まあ確かに」
「黙っていてもばれる話ですし」
「それも必ず」
「だからだ。もう話しておく」
そうするというのだった。これが王の考えだ。
「それでいいな」
「それがよいかと」
「では」
「これも王の務めだ」
それに従うというのだった。
「それではな。そうするぞ」

「そうされて下さい」
「そしてですが」
今度は家臣達からだった。王に対して問うてきた。
「王妃様はどう仰っていましたか」
「初夜のことは」
「臭いと言われたぞ」
この場でははじめて顔を崩した王だった。
「大蒜の匂いがするとな」
「そうですか、やはり」
「大蒜ですか」
「ははは、これから先が思いやられると言われた」
王は顔を崩したまま語る。
「そうな」
「ですから大蒜はです」
「慎まれた方がいいのです」
家臣達はこのことをここぞとばかりに話す。
「好き嫌いがありますから」
「ましてや女性では」
「いやいや、これは止めんぞ」
だが王はその崩した顔で語る。
「絶対にな」
「それではこれからもですか」
「その大蒜の匂いでベッドに」
「そうするぞ。しかしまああれだな」
王はここで話を微妙に変えてきた。
「あの花嫁にはかなり驚いたがだ」
「王の好みではありませんね」
「どう見ても」
「しかしよい」
それでもだと。王は言うのだった。

「よいぞ、あの王妃で」
「何故ですか」
「それはまた」
「政治がわかっているからだ。だからよいのだ」
王の顔が一転して真面目なものになった。
「それでだ。よい」
「政治がわかっておられるからこそ」
「それでなのですか」
「王妃に必要なことは二つだ」
王はその真面目になった顔で家臣達に話す。
「子供を多く産めること、そして」
「政治がわかっている」
「この二つですね」
「まああの立派な身体なら子供は多く産めるだろう」
王妃のかなり控えめに言ってふくよかなスタイルを思い出しての言葉である。このことは流石によくわかっている王だった。伊達に女好きではない。
「まずはそれはよし」
「そして次ですか」
「それもまたなのですね」
「政治もわかっている。ならばそれでよい」
「わかりました、それではです」
「これからフランスの為に」
「二人で尽くす」
王としての義務をだ。二人で果たすというのだ。そうした意味でも王妃は必要なのだった。王は一人で王となるわけではないからだ。
「そうさせてもらおう」
こう言ってその王妃との結婚を受け入れた王だった。アンリ四世の名前は今も残っている。豪放磊落かつ賢明な名君としてだ。これはその王の婚姻の話である。

とんだ花嫁　完

2010・8・3

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6540o/

---

とんだ花嫁

2010年11月1日22時55分発行